

幕末の日本海・隠岐で  
立ち上がった「自治政府」。

かつてフランス大革命期、「パリ・コミューン」という東の夢のような「民衆自治政府」が存在したことがある。1871年、たった72日間の若者たちの雄叫びだった。その胸躍る経緯は世界的名著との評価も高い大巻『パリ燃ゆ』(大佛次郎)に詳しい。これを読んだときの熱い想いを私はまだ憶えているのだが、本書『神と語って』は、あの滾(たぎ)りを再び味あわせてくれた。

実は日本でも、パリ・コミューンに先立つ3年前、1868年に日本海の島・隠岐で青年富農らを中心にした「自治政府」が光を放ったわずかな時期があったというのだ。本書はそれを史実に基づいて物語ったもの。幕末の混乱期とはいえ、なぜこ



神と語って夢ならぬ

松本侑子著  
光文社 本体1800円+税

んな奇跡が実現できたのか。著者は、主人公・井上整介(しゅうすけ)の心情の變(へ)ひだを巧みに描写しつつ、その軌跡を追う。

官軍と奥羽越列藩同盟の熾烈な闘いを背景に、虐げられた農民たちの蜂起が無血革命へとつながる。そして、その夢が一瞬にして政治の汚濁に飲み込まれ、潰えていくさまが異様に生々しい。

だが、特筆すべきは、著者が整介を理想的なヒーローとして描いていないことだ。時に過激に尊皇攘夷を叫び、時に臆病風に吹かれ逃げ惑う。酒色に耽る弱さも持つ。そんな人間の主人公だからこそ、本書は深い哀しみと切ない余韻を残して幕を閉じる。現代が失った「青春の光芒」といべきか。

評者/鈴木耕